

## 「あなたが主張する権利は命をかけて守る」

2015年10月02日

「安保関連法案」反対の声は全国に広がり、いつもどこかで、集会とデモが行われていた。私にもメールで連日、案内が来て、熱心さに敬服し、引き出されてきた。60年の安保反対運動より量と質は超えていたと評価するほどであった。安倍政権の強引なやり方と、戦争に引きずり込む法案の危険性を知り、無関心だった人々をも、政治に覚醒させる国民的な運動になった。それにもかかわらず、政府与党は強行採決で法案を成立させた。次の選挙では、しっぺ返しを受けるだろう。60年の安保反対運動後、挫折を味わった若者たちは深い虚無感に陥り、自虐的になり、大きな悲劇を生み出していった。しかし今回は、成立した「安保法」の廃止を目指し、地道な運動が展開されている。

今回の運動において、シールズ（自由と民主主義のための学生緊急行動）の誕生と働きは大きかった。彼らは自分の言葉で、闊達な発言をし、聞いていて清々しかった。シュプレヒコールもラップに乗せ、応答を求め、元気ももらった。ところが、シールズの中心メンバーであった奥田愛基氏が在籍する明治学院大学宛に、奥田氏と家族を殺害するという脅迫予告が来た。民主主義の根幹をなす言論の自由への許し難い挑戦である。

奥田氏は殺害予告が来たことを公表し、下記のように語っている。「なんか、僕だけならまだしも、なんで家族に対してまでもそうなるのですか…。何か意見を言うだけで、殺されたりするのは嫌なので、一応身の回りに用心して、学校へ行ったりしてます。被害届等、適切に対応してます。」「こちら特報部」の取材に対し「一人で電車に乗るのも怖い。安保関連法が関係しているんでしょうけど、犯人の心当たりはない」と答えている。

奥田氏の父親は奥田知志牧師で、北九州市で野宿者支援に取り組んでおられ、新聞、テレビでも大きく報道された。知志牧師は「やはり、怖いですよ」と表情を曇らせ、「息子が安保法に反対していることが原因なのは間違いない。快く思わない何者かがやったのだろう」と話している。また「安保法や殺人予告で黙るわけにはいかない。本当に大事なことは黙れない。犯人とも、対話は成り立つと信じたい。相手が何を思っているのか聞きたい」と語っている。シールズのメンバーで明治大学院生の千葉泰真氏にもツイッターで「殺すぞ」と書かれ、他の女子大生にも中傷する書き込みが日に何十通もあったという。

朝日新聞の元記者の植村隆氏は、従軍慰安婦問題で捏造記事を書いたと言われ、勤務する北星学園大学に「辞めさせろ」などの脅迫や嫌がらせが寄せられている。娘さんにも「殺すぞ」と脅しの言葉が吐かれている。植村氏は「捏造記事ではない」との司法判断を引き出すことによって、卑劣な脅迫行為を止めさせることになる、裁判で争っている。これらの脅迫が限りなく飛び交う本当に住み難い時代になった。脅迫者たちは自分の名前を明かさない。安倍首相の「70年談話」のように主語がないのである。主語を明記しない言葉は無責任で、死んでいる言葉である。そして、これらの脅迫行為に関し、政府の捜査、取締りが極めておざなりである。むしろ、「マスコミをこらしめるため、広告料をなくすように経団連に働きかけよ」などと、言論の自由を抑え込むような動きが目立つ。

18世紀のフランスの哲学者ヴォルテールは「私はあなたの意見には反対だ。だが、あなたがそれを主張する権利は命をかけて守る」と言っている。民主主義は、この言葉の上に成り立つ。反対者の意見を聞き、主語を明確にした責任ある議論の中で、あるべき社会を模索することが大切である。脅迫された方々の恐怖を思う。恐怖に押しされ黙したら、戦時中のような暗黒の社会になる。自由と民主主義は何としても守らなければならない。